

ユーワツに別れを告げた彼女たち

密室育児に苦しんだ私が、 子育て雑誌を創刊するまで

子どもが悪いとか、夫が悪いとか、周囲のせいにするのは簡単。でも、周りを変えるには、大変な労力と時間が必要です。それよりも、自分の考え方を変えるほうがずっと楽です

長谷川由香

（子育て向上委員会 代表）

「行く場所がある」人が羨ましい

孤独な育児に悩む、若い主婦が増えている。情報も経験もなく、悩みを相談できる知り合いもいない。そんな状況を打破しようと、各地で主婦自らがネットワーク作りを進めている。石川県で地域に密着した子育て雑誌を制作し、好評を博しているのが「子育て向上委員会」というグループ。自身も育児で悩んだという、代表の長谷川由香さん（30歳）に話を聞いた。

高校生のころは、働く女性に憧っていました。「バリバリのキャリアウーマン」になりたかった。国際ジャーナリストの落合信彦さんが外国で活躍する姿を紹介したビルのCMを見て、かつこいい、私もこんなふうに働きたい、と思いまして。それで洋楽や洋画が好きなこともありました。

り、アメリカの大学への進学を希望するようになりました。両親は共働きでしたし、リベラルな考えをしていると思っていたのですが、大反対されました。考えてみれば、父母とも海外に行つたこともありませんでしたし、私はふたり姉妹の長女ですから。でも、どうしても行きたくて、親を説得して留学を許してもらいました。

無事に4年で卒業し、日本で就職したのが1995年です。外国の大学を出た学生を探りたいという食品会社が地元の新潟県にあり、採用されました。そこでは実力以上に期待してもらい、海外出張も任されました。ある程度、自分の思い描いていたキャリアウーマンに近づいてきたかなあと思っていた矢先、当時の彼、今の夫との間に子どもができました。就職して1年半、仕事が楽しくて仕方



長谷川さん宅のリビングで企画会議中（左からふたり目が長谷川さん）。取材・執筆は各自で進めるため、オフィスなどはない

た。だけど、堕ろすなんてことはできませんでした。結婚を決意し、コンピュータ会社勤務の彼が暮らしていた、石川県に引っ越しました。

仕事をやめることには、複雑な思いがありました。無理を言ってアメリカの大学にまで行かせてもらつたのに、子どもができたから仕事をやめます、などとは親にもなかなか言えないですよね。打ち明けたら、絶句していましたけど（笑）。会社にも申し訳なかった。

ただ、悩む暇がなかつたのも事実です。新居を探して、引っ越しをして、結婚式をあげて、そのうち出産も迫つてきて……。そのため、専業主婦のつらさに気づいたのは長女の出産後でした。里帰り出産を経て、1カ月半後に石川県に戻つてきましたときには、近くに友達がおらず、どこに何があるかもわからなかつた。11月に戻つてきたのですが、金沢の冬は曇りが多く、からつと晴れる日がなかなかない。そんな重苦しい天気の中、赤ん坊と家でふたりきりという生活が始まりました。

私たちの世代は子どもの育て方なんて、習う機会がないですね。テレビに出てくる子どもって、いつも笑つていてかわいらしいのですが、実際の子どもは、ミルクをあげても、オムツを替えて、抱っこをしても、泣きつづける。なんで泣いているのかわからない。でも対応できるのは自分だけ。

実家は離れていて、頼ることはできません。夫は相談に乗つてくれましたし、頼りになりましたが、帰りはあまり早くありませんでした。朝、夫が家を出ると、夫が帰つてくるまで誰とも話すことのないような日々だったのです。

そのころ住んでいたマンションのベランダから、道を行き交う人たちを見ていました。羨ましくて仕方がなかつた。「行く場所がある」ことが羨ましかつた。

分には行くところがなく、一日中この部屋にいないといけない。もう一生、社会に戻れないんじやないかと、焦燥感が募りました。

あの半年は、人生でもつともつらかつた時期ですね。若いお母さんが子どもを虐待する気持ちもわかりました。アメリカ



「子育て向上委員会」で発行した雑誌、冊子、ムックの数々

こんな決断ができたのは、私が本当に育児下手だつたからだと思います。育児がちょっと苦手という程度なら、なんどなくやり過ごせたかもしれないけれど、家にこもつて孤独に育児をすることに私は耐えられなかつたから、今の状況から脱け出したいという意志が強かつた。マイナスのパワーがたまつていました。

このときは、失敗してお金を回収できなくとも仕方ないという覚悟でした。ただ、なるべく負担を減らしたいと思い、子どもに関連する企業を回つて、広告をとともに、「子育て向上委員会」を結成、雑誌作りをスタートする。10月には創刊号『子育て向上委員会』が完成した。

98年1月、長谷川さんは3人の仲間とともに、「子育て向上委員会」を結成、雑誌作りをスタートする。10月には創刊号『子育て向上委員会』が完成した。

活動がうまくいったのは、仲間に恵まれたおかげです。最初に声をかけたのが、今副代表（河崎由紀子さん）ですが、彼女が「面白い、やろうよ」と言つてくれた。それがきっかけで盛り上がり、具体化しました。

彼女とは公園で知り合いました。お互に同じ年頃の子どもを連れていて、徐々に顔見知りになつた。彼女を誘つて、運がよかつたと思います。最初に「そんなの無理だよ」と言わわれていたら、「子育て向上委員会」は誕生しなかつたかもしれません。ネットで「地域の育児情報がほしい」と発言していたふたりにも声をかけて、4人で活動を始めました。

夫の協力も大きかつたですね。私が何かやりたがつていると、彼もうすうす感

るのは、これしかない！と確信しましたね。石川県にそんな情報誌はなかつたので、これはもう自分でやるしかないと感じました。

かと理解を示してくれました。誌面に間違いがあつて、3000部すべてを手作業で直した際には、朝の3時4時まで寝ずに手伝つてくれたこともあります。

また、雑誌を出すにあたつて問題になるのが資金です。雑誌を作つて県内の書店に置いてもらうには、印刷代や製本代などで数十万円かかります。家計に響く額ですが、切実な顔をして頼んだからでしょうか、夫は出資してくれました。

そのときは、失敗してお金を回収できなくとも仕方ないという覚悟でした。ただ、なるべく負担を減らしたいと思い、子どもに関連する企業を回つて、広告をとともに、「子育て向上委員会」を結成、雑誌作りをスタートする。10月には創刊号『子育て向上委員会』が完成した。

編集作業は見よう見まねです。いろいろな雑誌を参考にして作りました。子どもを抱えた主婦が訪ねてきて、「育児中の主婦のための雑誌を作りたいんですけど、お金をください」と言い出す。それでも10社ほどの企業が広告を出してくれた。これには感動しました。

取材には子どもと一緒に連れて行つていきました。今思うと無謀です（笑）。もはまだ1歳になるかならないかですかから、昼間は何もできない。子どもが寝てからパソコンに向かい、文章を書きます。

創刊号はモノクロで60ページ、イラストや写真をちりばめた雑誌に仕上がりました。「参加型石川子育て雑誌」と銘打つて、妊娠・出産・育児の体験談や「子育てとストレス」についてのアンケートなどを載せた雑誌を作つて、妊婦施設つきのお店を取り上げました。美容院やレストラン、

スポーツクラブなど、結構ありました。

した。自分たちでは流通経路を持つてい
ないので、1軒1軒書店を回り、交渉す
る。どこも好意的に扱ってくれました。
おかげでほぼ完売となり、出資金も回収

吉川家文書

「1年半くらい美容院に行つていなかつたけど、託児施設があるなら、やつと行けます」というお手紙ですね。

子どもを産んで初めてわかつたのです
が、情報誌というのはナイトスポットや
ランチの美味しいお店の紹介など、
を対象にしたものがほとんどです。孤立
して育児に悩んでいる主婦に向けたもの
がない。だから、私たちの雑誌が受け入
れられたのだと思います。

創刊号の誌上でスタッフを募集したところ、10人ほどの応募があった。みな幼い子どもを持つ若い母親ばかり。「自分の経験を活かせれば」「知り合いを作りたくて」「取材を通して、育児情報を集めたかった」と、参加の動機はさまざまだが、活動を進めるにつれ日々が楽しくなった、という点では共通している。

自分の考え方を変えよう

集まつたスタッフの中には、編集経験者もいたので、レイアウトなども洗練されました。それでも最初のころは、ベビ

ーシッターの会社を紹介する記事に、泣いている赤ちゃんの写真を載せてしまうといった失敗もありましたが。（苦笑）

当初から、それぞれの家事・育児と活

動のバランスはとれていたと思います。

上がった記事を持ち寄るときだけ、編集長である私の家に集まります。普段はそれぞれが、お店の取材、アンケートの依頼など、担当の仕事を進め、自宅で記事にまとめる。育児や家事の空いた時間に仕事をするので、無理なく続けることが

私自身も、とても快適な生活になります。

違ひ、気分転換ができる。育児でカツト
なつても、仕事で切り替えることができ
ますし、子どもとの時間で、仕事の息抜
きができます。活動の場を多く持つて、
るほうが育児にとつてもプラスになる(一
かもしません。

こうして季刊ベースで雑誌を出すことができました。「小児科紹介」「チャルドシートについて」「パパの育児アシケート」など、人気企画も生まれました。ただそれでも2000年ごろから、今までの形では、雑誌制作を続けられなくなりました。というのも、スタッフが

第2子の出産後、シニを迎えたからで、私自身も99年の11月に次女を出産しました。その結果、残ったスタッフの負担が大きくなってしまった。でも、せっかくここまで続けてきたのに、やめるのは惜しい、なんとか方法を考えようということになり、会報誌形式を採用しました。書店で売るのではなく、会費を払った上に送る方式です。



はせがわ ゆか 1973年新潟県生まれ。ニューヨーク州立大学ビンガムトン校経営学部卒業後、新潟の食品メーカーに勤務。97年に結婚、石川県に転居し、長女を出産する。98年に「子育て向上委員会」を結成し、雑誌やムック、広報誌の制作を行っている。1目に第3子を出産予定

ちの交流の場を提供することが主な目的です。また、地元の出版社と組み、ムックも出しました。それまでに培ったネットワークを活かして、主婦500人にアンケートを取り、子どもを連れて行けるレス

今後も、「子育て向上委員会」の活動は続けていきます。自分の子どもたちが小学校に入れば、また新たな問題意識が出てくるでしょう。でも、孤独に苦しんだ半年のことは一生忘れない。あの経験が自分のやる気のもとになっていますから。年輩の女性の中には、「大変なのは今だけよ」と言う人がいますが、大変な真つ最中にいる人には納得できませんよね。大変だけど我慢する、ではなくて、大変だからどうしようか、という発想をしないと、育児の悩みはいつまでたっても解決されません。

自分の悩みを、子どもが悪いとか、夫
が悪いとか、周囲のせいにするのは簡単
です。私も、「なんで日本の社会はこう
なの?」夫の帰りは遅いし、家庭に入つ
た妻に再就職の市場はないし」と社会に
不満を抱いていました。でも、そんな周
りを変えるには、大変な労力と時間が必
要です。それよりも、自分の考え方を変
えるほうがずっと楽です。たとえば、子
どもがいるからやりたいことができない
と考えるのではなく、子どもがいるから

も育児を通して、いろんな問題に気づき、この活動を始めることができました。また逆に、こういった活動をしていたから、もつと子どもがほしいと思えた面もあります。長女とふたりきりで、孤独に悩んだままだったなら、ふたり目の子どもをほしいとは思わなかつたでしよう。今、おなかに3人目の子どもがいます。「3人目からがかわいい」とて言われることが多いんですね。それなら、ここで子育てを終わるのも癪だと思つて(笑)。楽しみにしています。